

第2回東京大学技術発表会

初の部局開催—運営のあれこれ

大学院総合文化研究科・教養学部 共通技術室 技術職員 関原 佑奈

1. はじめに—第2回東京大学技術発表会を終えて

平成30年2月15日、16日の2日間にわたり駒場キャンパスにて行われた第2回東京大学技術発表会は、本学の技術職員は勿論のこと、主催である総合技術本部の教職員、および開催部局である生産技術研究所、先端科学技術研究センター、大学院総合文化研究科・教養学部の教職員、そして本学本部の教職員のご支援、ご協力の元、無事に盛会裏となった。本来ならば謝辞は末尾に置くのが通例であるが、まずはお世話になった皆様に感謝を申し上げ、皆様のお力添えをいただけたからこそこのプロジェクト成功であったことをここに強調したい。第2回東京大学技術発表会に携わっていただきました皆様、本当に有難う御座いました。

本稿では、第2回東京大学技術発表会(以下、「第2回全学」)の運営について報告する。今後も第n回東京大学技術発表会が駒場で開催される可能性はあり、また、駒場の技術職員だけで大きなプロジェクトに取り組む機会もあるだろう。そのようなときの多少の手助けになればと思い、ここに記録を残すことにする。

なお、本稿と第13回駒場キャンパス技術発表会での本講演は、あくまで著者個人の見解によるものであり、第2回東京大学技術発表会実行委員会および、総合技術本部の公式見解ではないことを明記させていただく。本稿、本講演を

ご参照される際は、その旨重々ご承知いただきたい。

2. 「第2回全学」の概要

「第2回全学」の当日プログラムを示す。

第2回東京大学技術発表会 当日プログラム

1日目 2月15日 木曜日 会場キャンパス

| | | |
|---------------|---------|-----------|
| 11:00 - | 受付 | 駒場IIキャンパス |
| 13:00 - 13:15 | 開会式 | |
| 13:15 - 14:20 | 特別講演・企画 | |
| 14:30 - 15:10 | 口頭発表 | |
| 15:20 - 16:00 | 口頭発表 | |
| 16:10 - 17:30 | ポスター発表 | 駒場Iキャンパス |
| 18:00 - 20:00 | 情報交換会 | |

2日目 2月16日 金曜日

| | | |
|---------------|------|-----------|
| 9:00 - 12:00 | 見学会 | 駒場I・駒場II |
| 13:20 - 14:00 | 口頭発表 | 駒場IIキャンパス |
| 14:10 - 15:10 | 口頭発表 | |
| 15:10 - 15:30 | 閉会式 | |

プログラム上には記載されていないが、特別企画の一環として、部局紹介ポスターの掲示と部局紹介展示を発表会々場ホールのホワイエで行った。また「第1回全学」では、シンポジウムとしてパネルディスカッションを行ったが、「第2回全学」は駒場色のある発表会を、という光石衛総合技術本部長からのご助言もあり、シン

ポジウムは行わず、駒場キャンパス内の技術職員が管理する施設・装置の見学会を企画し、他部局や他大学の方に駒場キャンパス所属の技術職員や業務を紹介する機会を設けた。

「第2回全学」は、参加者220名以上、口頭発表講演15件、ポスター発表31件で、口頭発表講演会場は2会場、ポスター発表会場は1会場となった。

3. 「第2回全学」の運営体制

「第2回全学」の企画・運営を担った実行委員会は、複数の理由により第1回東京大学技術発表会(以下、「第1回全学」)時の実行委員会とは異なる組織体制を選択した。この節ではその選択に至った経緯と「第2回全学」の運営体制と各担当の主な業務について記述する。

3.1 実行委員会を組織するにあたり

去る平成29年3月、次年度に開催する駒場キャンパス技術発表会の打ち合わせの会議内で総合技術本部企画調整室員から「第2回全学」を駒場キャンパスで開催したい旨の説明を受けた。書面は無く、口頭のみによる説明であったので正確な記録は残っていないのだが、「初の部局開催ということで駒場キャンパス所属の技術職員を主体として運営してほしい」というものであった。その場で駒場キャンパスの技術職員から「開催や運営にあたって企画調整室からの要望や決まりごとなどはあるか」と確認したところ、「平成29年度内に開催すること以外は何もなく、会場となる場所の事情をよく把握している開催部局の技術職員が中心となって自由にやってもらって良い」といった趣旨の回答をいただき、前例のない初の部局開催ということで画期的でチャレンジングなプロジェクトになることが窺えた。駒場キャンパス技術発表会実行委員会がメール等で議論を重ね、第13回駒場キ

ャンパス技術発表会を延期し、「第2回全学」を駒場キャンパスで行うことに協力すると決めたのは3月末のことであった。

平成29年度内に必ず開催する、という制約上、一から実行委員会を組織する時間は無いと駒場キャンパス技術発表会実行委員会は判断したため、駒場キャンパス技術発表会実行委員会をそのまま「第2回全学」の実行委員会のベースとした。実行委員長は内々に企画調整室から指名があったようで、当時の駒場キャンパス技術発表会実行委員長であった生産技術研究所試作工場の三澤氏が任命されていた。副実行委員長は駒場キャンパス技術発表会実行委員会2年目の委員から選出した。「第1回全学」では、「総務部会」「分野部会」「企画部会」のそれぞれに副実行委員長を設けたが、「第2回全学」では駒場キャンパス技術発表会実行委員会に倣い、「総務担当」「編集担当」「広報担当」に新たに「会計担当」を加え、それぞれに副実行委員長を設けた4担当体制で組織した。全学の発表会、ということで駒場キャンパス以外からも実行委員を新たに募り、最終的に生産技術研究所11名、先端科学技術研究センター1名、大学院総合文化研究科・教養学部3名の、計15名の駒場キャンパス所属の技術職員と他部局14名の技術職員から構成された実行委員会となった。他部局は主に総合技術本部企画調整室員と総合技術本部研修企画委員の有志、そして2名の立候補による選出である。

また、実行委員長と副実行委員長の計5名で幹事会を構成し、適宜アドバイザーとして企画調整室幹事を招きながら各種運営に関する審議を行った。運営に関する重要な事項は4回行った全体会議やメール審議により全実行委員の意見を広聴、反映させるようにした。

なお、「第2回全学」実行委員には、総合技術本部長から、平成30年3月31日を終了期限と

した委嘱が行われた。

3.2 各担当の業務割り振り

「第2回全学」を運営するにあたり、多岐にわたる大量の業務を行った。紙面の都合上、すべてをここに記すことはできないので、「第2回全学」ならではの運営業務に特化して記述する。

3.2.1 実行委員長

☆協力部局

例年4月に、駒場キャンパス技術発表会実行委員会では、前年度の発表会の報告とその年の発表会の開催概要と予定の調整を行うため、実行委員長と数名が生産技術研究所長と大学院総合文化研究科長・教養学部長とそれぞれ面会している。平成29年4月の時点で総合技術本部から藤井輝夫生産技術研究所長および石田淳大学院総合文化研究科長・教養学部長に「第2回全学」についての説明がなされておらず、また第13回駒場キャンパス技術発表会を1年延期することの説明も必要であったことから、企画調整室幹事と企画調整室員同席のもと、面談を行っていただいた。また、技術職員の所属する駒場キャンパスの部局、ということで生産技術研究所と大学院総合文化研究科・教養学部だけでなく、神崎亮平先端科学技術研究センター所長にも面会させていただいた。その際、部局内の建物や人員をお借りする話に終わらず、せっかくの3部局合同の開催なので、是非、「協力部局」として3つの部局のお名前をお借りしたいとお願いした。どの部局も快く承諾くださったことで、開催部局内の許諾申請などの手続きが円滑に行われたほか、生産技術研究所からは発表会々場の使用料を全額免除していただけたことになった。会場費の負担がなくなり予算に余裕が生まれたことから、「第2回全学」の参加に伴う旅費支給対象者の拡大に関する検討が可能

になった。なお、本来発生するはずの会場使用料が今回は生産技術研究所のご厚意により免除されたこと、開催部局・場所によって会場費の扱いが異なると思われることから、会場費の扱いは開催毎に確認・検討する必要があることに注意されたい。

3.2.2 総務担当

☆見学会

駒場キャンパスというカラーをアピールすべきだ、というアドバイスを総合技術本部長からいただいたこともあり、「第2回全学」の目玉イベントとして駒場Iおよび駒場IIキャンパスの技術職員が関わる施設の見学会を実施した。平成29年3月に本学で開催された総合技術研究会では研究会の前日に実施したが、今回はメインイベントの一つとして2日目午前中を使って行った。駒場Iキャンパスをメインにした見学コースを2コース、駒場IIキャンパスの生産技術研究所と先端科学技術研究センターの施設を周る見学コースを2コース、計4コースの見学ルートから希望する1コースを事前登録で選び見学していただいた。参加者は学内外問わず、駒場Iキャンパスのコースで35名、駒場IIキャンパスのコースで53名の計88名の参加者があり、これは発表会参加人数に対して約4割に相当する。アンケート結果からは、見学会は概ね好評であったことが窺えた。

☆協力員手配

発表会前日と当日の計3日間の開催準備や当日進行は、「第2回全学」の実行委員だけでは人員が足りないことから、本学技術職員に協力員を依頼した。協力員は、事前参加登録者のうち、駒場キャンパス所属の技術職員と演習林等の遠距離旅費が支給される技術職員に依頼した。それ以外の他部局の技術職員には、駒場キャンパスに初めて来訪する方も多いと見込み、講演発

表、聴講に集中できるよう依頼を行わなかった。

協力員は当日進行のみで28名を要した。実行委員を合わせると57名で受付、クローク兼休憩所、座長、マイク係、情報交換会対応、見学会対応、写真撮影(生産技術研究所映像技術室および東洋文化研究所画像技術室)をできるだけ一人あたりの拘束時間が短くなるように分担スケジュールを組んだ。幹事会は、不測の事態に備えてPHSを携帯し、さらに受付、講演会場、休憩所それぞれに少なくとも1名の幹事会構成員を常に担当者として配置するようにした。

「第2回全学」は、発表会場は2会場と「第1回全学」の4会場と比較しても少なかったが、見学会を行ったことや、情報交換会々場と直前に行われたポスター発表の会場が駒場Ⅰと駒場Ⅱで離れていたこと等の事情があり、これだけの人数を必要とした。開催部局のキャンパスに土地勘がある協力員を大人数集めるのは難しく、早い時期から協力員の募集を掛け、事前レクのフォロー等の必要があると考える。

3.2.3 広報担当

☆学内広報

「第2回全学」では各部局の総合技術本部技術職員連絡会議連絡員(以下、連絡員)に本学技術職員への情報伝達の重大な役割を担っていただいた。「第1回全学」のときも連絡員が発表者募集など、部局内での各種連絡の窓口となっていたようだが、「第2回全学」は部局開催ということもあり、本学技術職員への確実な連絡網がより重要であった。主催である総合技術本部を介することで総合技術本部との情報共有も兼ねつつ、連絡員に情報の伝達をお願いすることを心掛けた。実際に、連絡員に発表会関係の業務の依頼を行う際は、企画調整室に送信いただくメール本文を幹事会が作成し企画調整室に提出したのち、企画調整室の名前で連絡員にメール

を送信いただいている。

☆特設ウェブサイト

「第2回全学」の特設ウェブサイト作成にあたり、トップページに「第1回全学」の様子を撮影した写真を大きく掲載したほか、見学会においては施設の概要写真を掲載するなど、「技術発表会に興味を持っていただく」ことを心がけた。また、駒場キャンパスを初めて訪れる方も想定し、開催場所(建物)の写真を掲載するなどの工夫も行った。特設ウェブサイトへのアクセス状況を確認したところ、「東大ポータルへの掲載」、「技術職員連絡会議連絡員へのアナウンス」や、学外へのチラシ送付後にアクセス件数が増加し、各種広報が機能していることがわかった。また、発表会当日はスマートフォンからのアクセスが通常よりも多くなったため、スマートフォンで発表会のプログラム等を確認される方が多かったのではないかと思われる。

☆チラシ等作成

「第2回全学」の顔とも言える、広報用チラシや予稿集の表紙は「第1回全学」に引き続き、史料編纂所の村岡氏を実行委員に迎え、依頼した。最初に村岡氏から素案を提供していただき、それを基に幹事会からの注文を村岡氏に伝え、修正案を出していただく、というやり取りを計20回以上行った末、完成した。幹事会からの注文が多く、ご多忙のところ大変申し訳ない気持ちであったが、村岡氏からは「詳細な指示があって助かった、一緒に作り上げることができて良かった」という旨のご感想をいただけて、著者としても本当に有難く、そして一緒にお仕事ができたととても嬉しく思っている。幹事にこういったデザインに明るい人はいなかったが、かといってデザイン担当に一任せず、強調したい部分や使いたい写真などを積極的に伝えたことで、デザイン担当の負担を減らすことができたのではないかと思う。また、チラシ等

に掲載する協力部局のロゴやその他許諾申請等を早めに完了させることで未確定要素を減らすことも広報担当の大事な業務であった。

☆部局紹介(「編集担当」と共同)

「第1回全学」で技術職員の所属する部局を紹介するポスターを作成、掲示したのに倣い、「第2回全学」も同様に部局紹介ポスターを導入した。新しい試みとしてポスター前に机を設置し、そこで部局の技術報告集や部局のパンフレットなどを展示、配布する等、自由に使うための部局紹介展示スペースを設けた。部局紹介ポスターは、テンプレートを用意し、内容は連絡員に依頼した。原則、印刷出力を自部局でお願いし、当日持参してもらう方法であるが、大判プリンターや当日持参が難しい部局は、実行委員会経費で印刷出力を行ったり、郵送を受け付けたりした。部局紹介の展示品も郵送を受け付け、当日に会場に受付備品などと一緒に運び込んだ。

3.2.4 編集担当

☆予稿集作成

全学技術発表会の継続性を考慮し、予稿集の体裁は「第1回全学」に準拠するよう努めた。また、予稿集発行は技術発表会の全運営コストに占める割合が比較的大きいことから、2社に見積を依頼し、低額な業者を選定した。結果としては「第1回全学」と同じ業者を選定することになったが、業者にも「第1回全学」のときのノウハウが残っていたようで、発行業務は円滑に進んだと考えている。

☆予稿原稿の確認

実行委員会の業務負荷低減のため、原稿はPDFで提出してもらい、実行委員会での修正作業は行わなかった。しかしながら、余白の設定が正しいか、また、発表申し込み時に登録する講演題目を用いてプログラム編成を行うことか

ら、発表申し込み時の講演題目と予稿の講演題目を照らし合わせ、必要に応じて修正版の原稿を再提出してもらうようにした。予稿の編集作業負荷低減により、講演プログラム等、実行委員会が担当する原稿の作成と予稿の提出状況管理に専念することができ、学内教職員には予定通り事前に予稿集を配布することが可能となった。このことは発表会の総合受付の混雑緩和にもある程度は寄与したのではないかと考える。

☆応募状況の管理

応募状況は本学本部所属部署が利用できるWebフォームサーバーを利用し、同システムからダウンロードできるCSVファイルをExcelやAccessに読み込んで管理した。Excel上では原稿提出状況やプログラム編成についても管理を行い、Accessでは参加証の出力や実際の出席状況を管理し、業務や目的によって効率良く使い分けた。

3.2.5 会計担当

☆情報交換会

「会計担当」は主に、「第2回全学」の運営および参加者等の旅費など開催に関する予算の執行と情報交換会の業務を担った。東京大学技術発表会は、本学本部の予算を用いて運営を行うため、予算の執行は、本部の意向に従う必要がある。全学の技術発表会が2回目の開催であることに加えて初の部局開催であったことから、一つ一つ取扱いを確認しながらの業務となった。「第2回全学」実行委員会が稼働している平成29年10月25日に「東京大学技術発表会実行委員会の設置及び運営に関する内規」が決定されるなど、全学発表会の運営に関して制度が整いつつある。第3回以降は、予算の執行についても内規を原則とした運用が行われると考えられるため、本稿では、もう一つの業務である情報交換会に絞って報告を行う。

情報交換会では、「第1回全学」に引き続き、当日受付での現金徴収を選択した。「第1回全学」では、技術発表会の受付時に情報交換会の参加費の徴収と予稿集の配布などが同時に行われたこともあり、混雑が発生してしまったとのことであった。「第2回全学」では反省を活かし、まず技術発表会の受付と情報交換会の受付を分離し、情報交換会の受付は情報交換会の会場で行うこととした。

また情報交換会の受付に際し、以下2点の工夫を行った。

①「第1回全学」では、参加費は3,000円であった。3,000円の場合、1,000円札3枚での支払いとなるため、徴収時に必ず枚数を確認しなければならない。また、集金後は多くの1,000円札を数えて集金額を確認する必要があり、限られた時間の中で正確性が求められる作業は難しかったと考えられる。「第2回全学」では「第1回全学」の情報交換会では料理が少なかったとの意見も反映した結果、参加費を5,000円に増額し、5,000円札での支払いを事前に周知することで、集金、および確認にかかる時間を大幅に削減することができた。

②情報交換会の参加登録者には、発表会の総合受付時に配布する名札入れの中に、あらかじめ記名された情報交換会参加証を同封し、情報交換会の受付ではその参加証と参加費を受け取り、確認後、領収書(と必要に応じてお釣りを渡す、という業務に簡素化した。情報交換会受付に必要なスタッフ人数については、参加人数、参加者1人が受付にかかる時間(15秒程度と想定)、情報交換会開始時刻から逆算した受付に費やせる時間(20分程度)から割り出した。5,000円札での集金は複数回にわたり周知してきたが、5,000円札以外で支払う方も想定し、5,000円札用と5,000円札以外用で2種類の受付を用意した。また受付の手前で2種類の受付についてア

ナウンスをする担当者を置いたことで、混乱を避けることが可能となった。

受付の後ろには、2名からなる確認デスクを設け、徴収した5,000円の確認と集金額の確認、参加証を元に名簿チェックを行った。一人の受付担当者が徴収・確認・名簿チェックを行うのではなく、徹底した分業制をとることで、複数の業務を同時進行で行い、また複数名での確認体制を維持することができた。

受付業務は、参加者のご協力もあり混乱なく余裕を持って定刻前に終了し、当日参加を希望した方への対応を検討する時間の確保も可能となった。当日受付での参加費徴収は、事前の銀行振込による参加費徴収に比べ、キャンセルへの対応が難しい欠点もあるが、「ある期日以降の連絡なきキャンセルについては、欠席でも参加費を後日徴収する」とし、本周知を徹底したため、大きな混乱なく終えることができた。

3.2.6 幹事会

幹事会会議は、実行委員会が発足してから解散するまでの12ヶ月間に計19回と密に行った。幹事会が全員駒場所属であったため、会議出席による移動時間が少なく、また緊急で会議が必要になった際に集まりやすい等、フットワークの軽さによるメリットはとても大きかった。また、開催部局事務局の貸出可能物品、建物の状況、学会等開催日の食堂の混雑の様子等、その部局固有の情報やその重要度の共有がスムーズであった。幹事会の所属部局が開催部局であったことは、特に実行委員会発足から開催日まで最低限の時間しかなかった「第2回全学」の今回については、とても良い方向で働いたと評価している。また、幹事会ミーリングリストや作業の進捗状況を管理するシステムを用いることにより、幹事間での意思統一やお互いの作業状況を把握できるようにした結果、業務を円滑に

進めることができた。参考までに幹事会メンバーによる幹事会メーリングリストへの投稿は、メーリングリストが稼働した6月21日から実行委員会解散日の3月30日までの間に約2,000通と、平均して1日約10通のやり取りを行い、お互い綿密に連絡を取り合った。

しかしながら、物事を決定するにあたり、実行委員会全体で決裁する必要のある事項、幹事会内で決裁する事項、主催の総合技術本部に決裁していただく事項の棲み分けが少々難解であった。例えば、封筒は何枚必要か、等は幹事会内で決めて良い些末な事項であるが、発表者募集の締切延長は、運営に関わる重要事項である。具体的にこの重要事項は、幹事会が実行委員会に提案し、総合技術本部企画調整室を介し、連絡員に情報伝達を行う流れであったが、伝達時に連絡員と企画調整室から、締切延長の延長が打診されたことがあった。これは、結果的には20件超の発表応募がその追加延長の期間にあったため、良い方向に転じることができたが、運営面では、追加の延長を検討するには決定期限が短く、慌ただしい議論となった末、実行委員会を通さず幹事会と企画調整室幹事で追加延長を決定することとなった。

臨機応変に動き、無理のない範囲で運営していくことも重要であるが、イレギュラーを減らすためにも実行委員会も総合技術本部も情報収集不足から発生する二度手間を防ぐ努力をしていく必要がある。そのためには、幹事会や実行委員会だけでは収まらない審議事項の洗い出しを実行委員会発足と同時期ぐらいには行っておくことが、円滑な運営を行うために重要であると考えられる。これらは運営の根幹に関わるため、引継ぎをしっかりと行っていく必要がある。

4. 振り返って

運営に携わって、著者の感じたことや反省点

などを挙げる。異論反論、意見評価の分かれるところではあるが、著者一個人の意見として受け取っていただければ幸いである。

4.1 実行委員会内の情報伝達

幹事会内で決定する些末と判断される事項を実行委員会全体で情報共有を行わなかったり、企画調整室と幹事会で決めてしまった事項を事後報告したりと、実行委員は「置いてきぼり」になってしまった感は否めない。幹事会も勿論であるが、本学の技術職員は本業が忙しく、封筒何枚、名札のデザイン、会場の机の配置など、必要ではあるが深く議論するほどのものではない問題に付き合わせてしまうのは申し訳ないし、時間を掛けてもらえない、というのが正直なところであった。実行委員会メーリングリストに些細な案件を投稿することで、重要な案件を取りこぼしてほしくない、という意図もあった。重要案件や周知すべき事項など、必要最低限の議論と情報共有は十分に行えたと自己評価している。幹事会の負担が大きくなるのは避けられないことであるが、技術職員全体の運営業務負担が可能な限り最小限になるよう努力することは、今後も東京大学技術発表会を続けていくためにも大事であるように思う。

4.2 連絡員への業務依頼

「第2回全学」では、「第1回全学」と比較すると連絡員の業務負担が多かったのではないかと思う。部局内の広報業務、各部局所属技術職員の旅費の試算、部局紹介関連の準備等、おそらく連絡員は「第1回全学」時の業務量を想定していたと思われるので、「第2回全学」で急に多くなってしまったことは申し訳なく感じている。だが、部局開催を行う上で、全技術職員との情報共有には連絡員は今後も欠かせない存在になると思われる。連絡員に依頼する業務を整

理し、お互い最低限の業務量で済むように改善していく必要がある。

4.3 実行委員会の組織構成

初の部局開催で選択した「第2回全学」式運営スタイルは、第3回以降の運営形態に一つの答えを出せたと考えている。実行委員を主に開催部局と総合技術本部の構成員から選出し、さらに全部局で公募も行ったこと、幹事会を開催部局技術職員で固めたこと、業務の振り分けを駒場キャンパス技術発表会実行委員会に倣ったこと、連絡員との協力関係、協力部局等、それらは開催部局によってどのスタイルが良いかはそれぞれ違うものである。回数を重ねる毎に分かってくる運営方式の良し悪しを情報共有し、取捨選択できる状態が望ましいと思う。そのためにも引継ぎ業務は勿論、各部局開催を繋げる主催の総合技術本部による情報やノウハウの保管管理は重要を極める。

5. まとめ

「第2回全学」を駒場で、と最初にお話を聞いた当時は初の部局開催ということもあり、どのような運営、開催になるのか見当もつかない未知であったが、なんとか無事に盛会裏に終えることができたと思っている。主催である総合技術本部が望んだ理想の技術発表会であったかは分からないが、「第2回全学」で得られたモノを土台にするなり反面教師にするなり有効活用していただいて、次の発表会や今後の技術職員の躍進につなげていただければ大変幸いである。

謝辞

第2回東京大学技術発表会を企画・運営するにあたりまして、たくさんの教職員の方々に大変お世話になりました。

総合技術本部長をはじめ、総合技術本部企画

調整室の皆様。当時の企画調整室幹事である板倉さんには、実行委員会と企画調整室を橋渡しいただいたほか、アドバイザーとして幹事会で有益なご助言をいただきました。そして、総合技術本部長や本部の各部署との調整を行っていただき、またお忙しい中、各種様々なご相談に乗ってくださった本部人材育成課の皆様。

開催部局である生産技術研究所、先端科学技術研究センター、大学院総合文化研究科・教養学部の教職員の皆様には、事務手続き、見学会をはじめとするたくさんの業務のご支援、ご協力を賜りました。

そして、本学技術職員の皆様。第2回東京大学技術発表会実行委員の皆様。協力員の皆様。特に広報担当としては、発表会当日の写真・動画撮影を行ってくださった生産技術研究所映像技術室の重田さん、鈴木さん、東洋文化研究所画像技術室の野久保さん、先端科学技術研究センターの窓口になってくださった加藤さん、各種ビジュアルデザインを考えてくださった史料編纂所技術室の村岡さん、皆様には本当にお世話になりました。

幹事会は、第2回東京大学技術発表会実行委員長の三澤さん、副実行委員長の葭岡さん(総務担当)、鎌田さん(会計担当)、前橋さん(編集担当)、と私(広報担当)でタッグを組み、5人6脚で走った12ヶ月間でした。このメンバーで良かった、と心から思っております。

たくさんの方々のご協力ご支援があったからこそ第2回東京大学技術発表会は盛会裏に終えることができました。ここに深くお礼申し上げます。